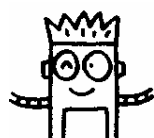


すぎたげんぱく 杉田玄白は、どんな人だったの



「^{かいたいしんしょ}解体新書」をつくるなど、^{らんがく}蘭学の発達に功績の
あった、江戸時代の医者・学者だよ。

杉田玄白の本名は^{すぎたたく}杉田翼で、玄白は^{つうしょう}通称です。1733年、^{わかさのくに}若狭国（福井県）
^{おばはん}小浜藩のおかかえの^{はんい}医者（^{ほせん}藩医）杉田^{なんざん}甫仙の子として、藩の江戸やしきで生まれま
した。母親は、^{なんざん}難産が原因で亡くなりました。父親が西洋流の外科医だったので、
^{らんぼうげか}蘭方外科（オランダ医学の外科）を学んで、藩医になりました。

オランダの^{かいぼうしょ}解剖書を^{やく}訳して、「解体新書」を出した

1754年に京都で、日本で初めての解剖が行われました。これに^{しげき}刺激された玄
白は、オランダの解剖書「ターヘル・アナトミア」を、藩に買ってもらいました。
そして、1771年に、^{まちぶぎょうしょ}町奉行所の許可をもらって、^{こづかっぱら}小塚原の^{けいじょう}刑場で、^{なかがわじゅんあん}中川淳庵・
^{まえのりょうたく}前野良沢とともに、^{ざいにん}死刑になった罪人の死体解剖に立ち会いました。その場で、「タ
ーヘル・アナトミア」の解剖図が正確なことを知った玄白らは、その本を日本語に
ほん訳することを、約束し合いました。そして、4年間の苦心の末、1774年に、
5巻からなる「解体新書」を完成しました。「解体新書」は、日本の医学にたいへ
^{えいきょう}ん大きな影響をあたえるとともに、その後の蘭学の発達に、大きな役割を果たし
ました。

たくさんの弟子を育てた

その後の玄白は、藩につとめたり、^{かんじゃ}患者を^{しんさつ}診察したりしながら、^{じゅく}塾を開いて、
^{おおつきげんたく}大槻玄沢らのたくさんの弟子を育てました。また、「解体新書」をつくる苦労を書
いた「^{らんがくことはじめ}蘭学事始」のほか、「^{けいえいやわ}形影夜話」「^{オランダいじもんどう}和蘭医事問答」などの書物を残しまし
た。1817年4月に江戸で、85歳で亡くなりました。



東洋医学の医者たちは玄白を、
医学界の「賊」と非難したそうよ。